「親分、良庵さんが来ましたぜ」

11 う ヘエ、 銭 町内 形の 平次は居ずまいを直して、客を迎えました。 0 本道 朝から変った人が来るものだね、丁寧に通すが (内科医)、 頭を円めた五十年輩、 黄八丈に縮 服部良 庵 緬ゐ 11 ع

羽織と言った、型の如き風体です。

ろう 親分、 ね さっそくだが、 大徳屋孫右衛門が 死んだことは お 聞きだ

聞きましたよ。 良庵はろくに挨拶もせずに それが何うかしましたかえ?」 、キナ臭そうな顔をするの でした

「どうもしないから不思議なんで」

ヘエー」

ど 違 せ 往来では、月に二三度ずつ逢 大徳屋さん すると?」 の って、 4 ぜ 元気者 い三年に 機嫌 が、 の好 は大夫な人だ 一度、 ___ い挨拶を聞 ع 晚 五年に のうちに冷たくなろうとは思わなか か 5 (J っている。 一度くらい て別れたば 私を招んで身体を診せる 現に昨日も昌平 のも かり、 のだが、 まさか、 ・橋ですれ あれほ 0 のは、 つ 席や

平次は膝を進めました。

か りなんだが、 点 を ちゃ 変死でな 11 け な いことだけは確かで」 11 0 ね、 親 分、 私 は今 死骸を診て来たば

とが起 でネ。 逝い 思 殺され つ つ てな 兎も った 違 たわ 角、 時 11 な け 親分の 私 11 でも、 が、 の言 耳に入れ どうも、 つ 自害した たことを思 て置 私 わけでもなく、 には け 11 ば、 出して下さるだろう 腑に落ちな 後で 何か () 面 ح ع でポ 白 が < な ッ e s IJ

腑 匂 る に 腑に落ちな 11 服部良庵 さすが ちな ح は か 0 時 に つ 4 つまま 長 た か ん 5 にも 嗅ぎ出 で? 間 れ たような 0 経験 () ろ کر いろあるだろう て居たこと 調 専 子 門家 で し た。 らし に 思 が、 が e s 11 当 力 後 ŋ ン 一体どこが で、 ま に な た。 大事 つ て 考え 件 何 う

胸 をはだ け て 見 ると、 身体 が び つ < ŋ す る ほ ど 瘦 せ て 11 が

第一の不思議さ」

白髪染が流り た位 孫右 そ そ 衛 門 に、 か から?」 さん 5, あ れ落ちて、小鬢が真っ んな に白髪があろうとは、 b う 5洒落者× 少し上等 の白髪染を使って居そうなも 死顔を見ると不精髯 白だ この私でさえ気が 四十にな だらけ ったば 付 か そ なか か 0 りの 上

顔は 逢 好ご つ た時あ 変る 0 ん だ な が に元気だったが、 十歳位は老け 死顔を見ると て いたよ」 も死

だ 右 衛 け 良 庵 帰 の言 報 0 死 告 9 に、 を済 うことは て行きま ま 抹ま せ した。 る 取 0 陰影 止め b があることは疑 良 庵 あ は りません 気が 軽くな が、 e s もありませ とにかく、 ったよう ん。 大徳屋 そそ 孫

八八

そ の後を見送 って、 平次は隣 の部屋に遠慮しているガラッ八 の

八五郎を呼びます。

「ヘエー」

「聞いたろうな」

重だも の 耳 でも塞っ が な き Þ 聞えますよ」

Ŧi. 郎 はニヤ リニ ヤ リと 膝で這 11 寄りました。

それな ら言うことは あるめえ、 気の毒だが、 また葬り 行 9

てくれ」

やけに葬えが流行るん だね。 行きますよ、 行くには行きますが

――何を嗅ぎ出しゃいいんで?」

こ くれるんだから、 ん 良庵さんのような、 んな 霜 枯 時 が れ ど き には、 念の 葬 物 () ために皆な 事に 酒 に酔 馴 う れ た医者が 0 0 P 顔 色でも見て 酒落れて居るぜ」 折角あ 来るが ん な に言 e ý 61 つ 7

_ ヘ ッ _

八五郎は 平手で額を叩きながら、 それ でも素直 に 出 か け て 行き

ました。

楽に 5 ると、 雨 大町人中でも手 を降 徳屋 落ち込み、 お 茶 商売よりは遊 らせると 孫 も香道 右 衛 札差 e s b 堅 門 器 う大通気取 ع 11 の株を び 用 家風を褒め 11 う 一方 の方が面 0 何 で は 噛じ り 万 白 の 両 られ ŋ お 蔵前 狂態 くな 廻ると、 かに売り ま ŋ, でした。 札差 したが、 雑ぱいぱい 払っ とう 衆 0 て とう 孫右衛門 楊弓、ようきゅう 底 吉原 抜 先 藤ら に け 0 ま 拳は 女道 判 な は か

天 村 も恐れず、 と妾が三人、 お 蔵 前 か ら引 人 越 にも愧じぬ暮しを続けて居たのです。 本妻のな した、 松永 い気楽さと、 町 0 家に だけ 諫さ め手のな でも、 お () 柳 無 軌道さに、 ぉ

「どうした八、孫右衛門が化けて出「親分、驚いたぜ」

「そんな洒落れた話じゃねえ」

リと 宵 0 うちに 帰 つ て来た 八 <u>F</u>i. 郎、 苦 e s 顔をし て 平 次 0 前

へ、長火鉢を挾みました。

酔 った 様 子も ねえ が 解 つ た、 お 通っ 夜ゃ に 酒 0 出 ね え 0 が 気

に入らなかったんだろう」

そ れどこ ろじ ゃ ねえ。 酒 は 浴 び る ほ ど 出 た が、 あ れ

られちゃ呑む気はしねえ」

「どうしたんだ」

「ま ア 聞 11 てお < ん なさ , こう だ。 親 分

「フーム」

ガラ ッ 八 の 話 は 別 に 変 つ たこ ح で はあ りません。 躾っ け \boldsymbol{b} た

みもな *()* 達 0) 間 に、 何万 両 11 う 大 身代を遺され た浅ま

唯まざまざと描き出 しただ け 0 こと

ね親分、 主人が死ん だと () うの に、 涙を流 て () る 0 は、 風か 邪ぜ

を引 た猫 の子 疋だけと は驚 く じゃ あ り ません

町 内 酒 屋 0 衆は二三十 か ら 菰冠 を 取寄せ 人 来て いる 中 が に は 朝 歌 つ を か 唄っ ら、 て ま る る で 0 \boldsymbol{b} お 祭 り騒ぎ

「家の者は何うしたんだ

そ れ が 面 白 () ん で の千代次郎と、 番頭 0 才吉と、 妾が三

時々お棺 間も ら、 がお互 . 見た 寄り付く者もありゃ それに大徳屋へ三年前から入り込んで、支配人見たいな、 し 眼^ゅ に睨み合 な の前 事を で口も利かな へ行って、 って、 している浪人くずれ 一文も余計なものは取込ませま しません。 線香を立てては湿っ -そんな風だから、 浪人くずれ の 草間六弥、 æ の草間六弥だけが、 い顔をして来るだ 仏様 ح れ の傍なん だ いとするか け 0 人間

け

その るよ あ るだろう。 五六人ゾ 一人の身体 を見 癖 うな 死んだ孫右衛門は、一 ると、 b口 ゾ 第 ので、 : が 動 口 一五丁町 跟っ 人間 くと、五六人の眼が あ いて行く。 死んじゃつまらな んな厭なお通夜は見たこともありませんよ。 は暗 くなる 慾と慾が、 俺が死んだら、 動く。一人が立ち上がると、 と言って居たんだそうで、 いと思 家の 中へ旋風を巻いて居 () ますよ」 困る者はうんとあ

ガ ラ ッ八が、 つくづくそんな事を言うのです。

「まア 日 ば e s りは、 やな、 貧乏に生れ付 どうせ金持にも大通にもなれるお互じ いて良か ったと思ったぜ。 Þ ねえ」

だ厭だ」

何を言 やがる、 質 0 流 れ 月が 来る度に 金 持 に 生 れ ŋ 良

かった――って言ったじゃないか」

次は半分茶化しながら聞 (J て居りました

あ な浅まし ı, 図に比べ ŋ 腐 つ 0 枚 Þ 枚 流

ッ ハ ッ、 大層悟さ りやが ったな」

人は沁々と した心持で笑いまし た。 が、 事件はこ れ が ほ ん 0

端と 緒さ で、 ح の後 に つ づく恐ろし い発展 は、 全 笑いごとではな

かったのです。

その晩真夜中過ぎ――。

親 分 さん、 た、 大変 です、 す ぐ 願 います」

息せき叨って戸を叩く者があります

「誰だい」

裏 い心 持 で 親 分 0 へ泊 り込 ん だ 八五 郎は 居候

畳 に 敷 11 た床 0 中 か 5 鎌背 をも たげ ま た。

大徳屋 か らま e s りま した、 大変なことが

「どうしたッてんだ」

7 つ きり遺産 争 11 が 嵩う じ て、 妾 三 が 掴 み 合 11 b 始 め

ろう そんな図を頭 の中 に描きながら、 ガ ラ ッ はまだ 床

でモゾモゾして居りました。

「旦那が殺されたんです」

「何?」

「匕首で突殺されたんです」

何 だ ? どこ 0 旦 那が殺さ れ た W

「大徳屋の主人が、――孫右衛門で」

馬 鹿 野 郎、 人の寝入ばなを起しやが つ て、 飛んでもねえ野郎だ。

大徳 主 一人なら、 夜~ のうちに卒中 で死んで、 今晚 は お 通夜

じゃ 何 処 な か 11 か。 0 悪童の悪戯と合点して、 棺 の中に いる仏様を、 匕首で突殺す奴があるものか」 ガラッ 八はポ ン ポ 言 い 乍^{なが} 5

床の中へもぐり込みました。

ですよ、 親分、 旦那が 殺 され た λ で

外から叩く拳は少しも休みませ

6

「手前は誰だ」

平次も奥から起きて来ました。

大徳 屋 0 奉 公 人ですよ、 勘次と W

あ 0 小 僧 さ 6 か それじゃ満更嘘じゃ ある めえ、 八、 戸 を 開

けてやるがいい

ヘエ

=

に 線 大 屋 を あ は 煮にえ げ る 人も り返 な る 11 騒ぎで 心 細 11 有 た。 様 で あ 棺 つ 0 中 7 め \boldsymbol{b} 5 れ とに て か ろ

後 3 度 は 暗 確 か 11 廊 に 下 死 んだ筈 で 後 ろ 0 主 か 人孫 ら 匕首 右 で、 衛 門 左肩胛骨 が、 平常着 下 まま、 を 縫 わ 仏 間 紅は

に染んで死んで居たのです。

そ を 5 て 続 飛 目 れ 0 見 袖 を ば 付 け 避さ て か け で 0 居 下 行 た 灯 け り を は た 0 0 つ て 搔い た真 中 居 酒 は 0 潜ぐ る \boldsymbol{b} で に 小 呑まず、 主 ٤, 僧 る ッ よう た 人 暗 0 勘次、 な廊 0 仏 間 孫 に五六間来ると、 遺さ 右 下 0 産るあらそ 後 衛 で、 門 ろ 七 か に バ 11 5 な 血 0 ッ 渦 潮 つ タ 巻 た 唯 0 IJ ば 中 ちょうど唐紙 な ^ 人に も入 か に ら 断末 ぬ り 突当りましたが 悲 らず 0 鳴、 生真面 魔 0 う 裹淋 0 お 隙間 目さ で

出 に ま そ 勘 次 腰を とす 声 抜 家 る か に 0 すも 中 を お 0 祭 0 吹 き 捲く 騒ぎも ば 鮒な 5 0 る ょ 0 う 遺 は は 無言 産 に 争 П 新 を 0 11 混 動 P 11 不 乱 か す 気 が 続 b 瞬 味 に く 0 ば 嵐 か 7 所 吹 あ 懸 飛 命 ば 新 ŋ 這 さ 11

死 0 主 に近づこうとする者がな の 元 0 死骸 を 確 か め ょ 11 はが うとする者もあ りでなく、 棺 り ま の 中 せ に 納 め た筈

そ 中 か ら、 勘次は 飛出して来て、 平次に救 11 を求 め た 0 でし

た。

落着 家 0 平 者 () は、 てお 親 ع 分、 ガ りま 遺産 ラ ちょ ッ した 争 八 う が 11 ど が、それでも、 大 とはまた別の心持で 徳屋 () いところ ^ 行 つ た 町 時は、 内の衆は半分ほ 睨み合っ さす が に て 居りました。 ど逃げ帰り、 通 ŋ 騒ぎは

です。 番先に冷静を取戻した のは、 さすがに浪人くずれ の 草間 六弥

うか」

大変な

事

が

あ

つ

た

ん

で

す

つ

て

ね、

まず

仏

様

を見

せ

て

貰

11

ょ

貧弱 ŋ 眼ば な 5供物で か 通 り 光 0 り ま 5 中 せ た。 て なん 11 型 る 男 0 0 如き逆さ 異状もなく 女を尻目に、 屏びょ 風ぶ 据え 平次とガ 香^c; 華; られ た棺 そ ラ れ ッ ^ 八 思 平 は 次 11 き

蓋な を 開 け る

は

掛

ります

あ ッ

ゾ 口 ゾ 口 跟 11 て 来た人達は、 思わず声を立て た 0 P 理 は

りま せ

差 衛 門 棺 が 0 中は せ 白 た い経帷子を着たまま、 空っ 灯 中 ほ に と思 叙然として () きや、 入棺した時と少しの変りもなく 死顔を 昨夜卒中で 仰 向 け て 死んだ主 居 人 0 孫右

次はそれ を 確 めると、 横手 の

フ

血 の 海、 匕首な に経 わ れ てもう一 人 の 孫 右衛門

手を る 者も な 横 た わ つ て お ります。

ら、 取 つ 返すと、 位置 不 傷 -安と焦躁 口をほ ん 0 遠卷 と通 り 0 調 顔 を べ た 平 とわ 次 たり は 見 元 廻 0 仏 間 に

「草間 さん ち ょ 11 お 顔を

番後 ろ の 方 に、 落着 つ て差控えた、 草 間六 弥

た。

私も 話 した *()* こと が あ る • どうぞ此方 ^

草間六弥 は た つ て 奥 0 と間 へ導き入 れます。 깯 十 Ŧi. 六

言わ せるとまだ 何 処 か に、 武士らしい角々がとかと が 残 つ て 居 ŋ す

肥

つ

で、

髪形

も着

物

0

好みも、

す

つ

か

り

町

風

で

す

が

物

を

へは行燈を: 挾 ん で、 立 会前 0 剣 士と 剣 士 の よう で

相 対 ま した。

「承りましょ う か 草間さん」

平次 は 初太 刀 を入 れます

であろ ۇ _

第 に、 あ 仏 棣 0 素姓は ?

土手 ・の煮売屋 の 親^ぉゃ 爺じ 綱 屋 0 綱七 -この家* の主人 によく似

平^ふ 常ん か 5 孫 右 衛 門殿が ~贔屓に てや って居たが」

七な 5 Ŧi. 以 上 0 筈だが 成程、 小鬢を墨で染めた はそ

れを す た め で す ね

通 り さ が は 平 目 が 届 ね

ち ゃ 4 けません

で 私 が 何 も彼 P 知 つ 7 11 ると 睨 ん だ 0 は 工

は、 たり 棺 もう一人、 そう言 いえ、 た中で、 の蓋をあけて、 お前さんばかりだったと言うじゃありませんか、 の作者は、 形見分けに睨み合 そ った () 少しも驚 P 真^{ほんもの} つ は 草間さんに決って居ますよ、 0 わ 中 か の主人を殺した下手人は驚かなかっ ざとの \boldsymbol{b} 0 11 た様子 仏に変りのな 知 れ って居 け反るほど吃驚したかも知 ぬ な のな る 中で、 () のは、 *()* のを見て、 殊勝 草間さん 皆んなお ら 皆ん 湿め ば れませんよ」 な 祭騒ぎをし か つ た筈だが」 胆を冷や りだ」 それ て に、 た

様子 平次の打ち です。 解 け た 調子に、 草間六弥 b 何となく 心持 が ほぐ た

四

聞 くと、主人の孫右衛門殿は、大変なことを思 昨夜べ 宵 のうちのことだが、 し続けました。 土 手 0 綱 七 0 (J 死 付 ん 4 だ話 たのだ を 吉な 原か で

草間六弥は話

0 11 思 屋 自 分 むように 右 ほど人望 衛 門 は、 な 金を つ のある者は て 居 湯 た 水 0 0 です。 な 如 く 費う者 自 分ほど有益な存在 0 慣な わ で、 は な 世

な とも が 面あ \neg るだろう』 木 町 そして Щŧ るだろう』と思 内 辞じ 便ん の衆は、 佞ねい とも気の ٤ 『家中 『三人の妾は身も世も 安 光明を喪る 付 価 の者は、 い込む な か ぬ孫 世辞 ったように落胆するだろう』 追ばはほ のは当然のことでした。 右 に 衛門は、『俺が死んだら、 取巻かれ でも切りた あらぬ て、 思 それ い心持になるだろう (J に を 歎き 阳 五五丁 諛 悲 さぞ皆 町 b は 便 闍 佞

の中 な そう考えた末に、孫右衛門は、『 で 腹 心 誰 た が 0) 草間六弥 つ 番俺 た 日だ 0 ため に 漏ら け 死 しもするようにな に泣 ん で見た (J てくれるだろう』 もう一 e s 度生き返 多勢 りました 0 俺 0 つ 讃ん て来られ 美者崇 そ う 思 11 者

何

:千両、

何

万

両

となく

バ

ラ 撒*

いた金が、

人間

0

真

(情ま

で

()

得

とで、 前 は 運 綱七の棺 るものと、 11 だが な 松永町まで運んで来た。 綱七が死ん すぐ土手 か 細 私が作者などとは、 ったよ、それ 鑑定違 工だ へは石 孫右 から、 の煮売屋まで飛んで行 だ と聞 衛門 11 っころと古蒲団を詰 くと、 もこれも孫右衛 手数は は思い込んで疑 11 うも 夜泣駕籠が暗 そ 飛ん のだし か か で 5 つ が P な って、 門 俺だったらと思 な めさせ、 いもしな 11 殿 腰を抜かすほど金をや が 61 0 投出した小判で三百両、 そ 物好きか れ か 死骸を貰って、 ば ح つ たも ん か 5 な ŋ ったに違 始ま は イ 0 です ヤ な 親 つ たこ 夜中 分 つ な て

「それから」

平次は静かにその先を促します。

ぎ、 着物を換えたり、 主人の孫右衛門は、 は、納戸の なんと の後ろ たり、 に 床 ある、 中 小 部 屋 に た 身を潜 0 は 真 中過

それからまる一日様子を窺った」

手 混こ ん だ事を たものですね、 そ で本 当 泣 11 は

何人ありました」

「たった一人さ」

「そいつは面白い、誰です」

成程 私さ あ んまり情な 4 らだ」

11

平次は笑う気にもなりません。

原^ゕ 町 Þ 虻ぁ が 衆 P 遊 兀 死 び 友 ん 達 だ ほど は に 押 b か 思 け わ て 来 な て 11 だ な ころうし 祭 0 ょ う な 騒 ごぎだ、

横着者のおうちゃくもの ぬ と鼠鳴を それよ て居た」 お ŋ 気 村 な て 0 喜 ど 毒 ん は な で 0 居た は、 病気でブラ 三人 0 お 女だ 柳と ブラ 来た して居 空涙 ひ に た つ は、 くせに こぼ 始終ゲラゲラ す どころか、 主人が死

と思 番頭 は 0 つ 才 た な 吉な か、 41 ど 朝 お 隣 は つ か 0) 5 朝 加か 積が 酒 ら算る 屋ゃ び た 安 盤は ŋ 兵 で 衛 ば 歌 か な ど ŋ つ 弾じ て は 居る」 11 借 て、 金 が 仏 様 棒 引 0 顏

かも れ だ け 知 様 れ 0 な 物 子 が 41 遺こ Þ 後 る 取 か 形 見 判 は 甥ぃ つ た 0 け 千 b 身 代 0 次 代 郎 Þ 0 な だ 始 が 末 11 で 気 ど 0 ん 弱 な 11 騒 代 ぎ が 始

. | [']

骸を見 出そうと の 様 れ ば 子 を、 判 て私 る が引 が 納 戸 襟 止 に 隠 \$ め たこ 袖 れ て 見 ح 滅茶滅 か て 居た ど 茶 主 ん 人 に な 噛 0 孫 み □ < 破 惜ゃ 衛 9 門、 が た ほ つ た 何 か べ ん 飛

| | |

大方は 平 察さっ 次 b笑え た ح な で 61 気 す が 持 に そ な れ り ま で P す 草 間 六 弥 0 細 か 61 説 明

事 涙を流 に過させよう て П とす 惜 ると、 が る主 人を Þ は り 押えて、 気 になると見えて、 と B か \boldsymbol{b} 今 晚 納 だ 戸 け か 5 無

処を誰 話 だ。 仏間 本当に死んでしま が 見付 の裏からお通夜の様子を覗 けて、 後ろ っちゃ、 か らズブリとや 孫右衛門殿も気の毒だ」 いて居たのだろう、 つ た。 され け 其

草間六弥は何 も彼も言ってしまっ て、 朩 ッ とした様子で 顔を挙

げました。

下手人の心当 りは? 草間さん」

「それは判らない」

「それ では、 主人が 生きて居ち ゃ 困 る の は 誰 ?

「皆んなだよ、 千代次郎も 才吉も、 お 柳も お辰も、 お 村も

お隣の安兵衛も」

「草間さんは?」

死ねば、 仏と勘次郎だけは、 番頭と仲の悪い勘次は明日にも追出されるかも知れず、 主人が生きていてくれた方がよい、 主人が

居候 の俺は、 自分から遠慮して身を引かなきゃなるま

形見分けの指図書のようなものはあるでしょうか」

ある筈だ、 才吉が預 っているだろう。 身上は千代次郎 の の、

0 女共には千両ずつ、 才吉は三百両、 あとの奉公人は五両三

両ずつ貰う筈だ」

「草間さんは?」

碗ゎ が つ、 茶入 が つ そ れ つ 切 ŋ

間 六弥 の唇に は、 薄笑 () が 浮びます。

五

平 次はそれ か ら順 々 に 家 中 0 者に逢っ て 見ました。 番頭 0

は、

旦那が亡くなれば禄 エ 三百両 のお に 離れます。 形見を頂 くことに この先どうして は な つ て e s 居 11 か、 ります 途方に

暮れましたよ」

蔵前時代から十五六年も 手堅そうです。 そう言 って、 慎み深 11 孫右衛門に 目 を挙 げ ŧ 仕えたそう た。 三十 で Ŧi. 六 見 0 か け 寸 以上 11

は少な 草間さん e s わけ は茶 碗 ゃ あ るま つ 茶 *()* 入 つ か 貰 わ な 11 と言う か ら、 三百 両

「ヘエー」

何やら不満らしい声です。

何 か言 いたいことがあるん じ Þ な () 0 か、 番 「頭さん

自慢 の品 で、 三百両 はおろか三千両でも買えません」

「成程」

別

に、

ございません、

でも親分さん、

あ

の茶碗と茶入

こんな事を私 が言 つ た ح は 仰 Þ らな 11 ょ う に 願 11 ます。 元 が

武家だけ に、 あ 0 は 怖っ 11 ところがごさ います」

よしよし」

平 次はそれ 以 上 一に追及い しませ ん で

呼 出され た 0 は、 小 僧 0 勘次

「小僧さん、先刻は御苦労」

「ヘエーー」

たというが、 ろ で お前 それは 悲ぬ 男 鳴い か を 41 聞 11 女か 込ん 廊下 で 人

「男ですよ、親分」

14

は主人が

「どうして男と解った」

力 で解 るじ やあ りませ ん か 11 きな ŋ 突当 つ て \vec{p} Ξ 口

もしなかったんですもの

「誰だか、見当はつくかい」

「それが」

勘次は首を捻りました。

背 は高 か つ たんだね、 前 が 袖 0 下を 潜 つ て 向う 行 つ た

と言うくらいだから」

ヘエー

背の高 い男というと誰だい、 才吉は 小男だし、 草 間 さん は 肥 つ

た方で、 千代次郎は中背の華奢男、 お 隣 0 安兵衛 は 高 41 な

違 いますよ、親分。 出会頭、私 0 (頭が向 う 0 胸 に 当 った心持 は

どうも木綿物じゃな か ったようで

っ と ?

絹物を着 ている男と いうと、千代次郎 か草間六 弥 0 外 に あり ŧ

せん。平次は併し話頭を変えました。

お柳とお 辰と 村 の三人のうち、 ど れ が 番主 0 気 9

いたんだ」

お辰ですよ」

番 若 十 い 0 お 辰 が 孫 右 衛 門 身 に め たこ とは

考えられます。

「一番気に入らなかったのは?」

「お村かしら?」

は 少 年勘次に 解 5 な か つ た でし

のうちで、 番 力 0 ある のは



©2017 萩 柚月

踊 0 師匠 だ つ たって言うけ れど、 あ なに

そんな事でい て大柄 ですも いだろう、 <u>の</u> 次は千代次郎を呼んでくれ

入れ違 エ 甥ぃ 千 代次郎 れは二 **F**. 店な 者 風 0

タガタ顫えるぱ か りで、 何を訊 ても埒ら が あきません。

の身上がお前 0 \boldsymbol{q} 0 になるそうじゃ な e s

「へ、ヘエ」

叔父さんを誰が殺 たか 見当が 付 か

「へ、ヘエー

度死んだ人 が 又殺され たのを見て、 ど んな心持だ た

「へ、ヘエ」

平 次は諦めるより外に仕方もありません。 真^{ほんも}の 0) 孫右衛門を幽

だ に け マ が と間違えて、 ゴ 0 マゴ 土台が それ に 7 居た 無 て 我無中 は 0 下 に 男にあろうとは 手人 して · で 刺 の手 した 勘 際 次 が の 想えな ならこの に 良過ぎます。 突当られ か 男に つ た て 間 引 悲 0 違 < 鳴 で ŋ 0 11 返ら あ 後 で ŋ な せ

の 時

親

分

ガラ ッ 0 Ŧi. 郎 が 顎ざ を 出しました。 大分収な あ りそう

「此方 入 れ

郎 を帰 て、 平次 0 顔 は憂欝です。

は 草 間六 弥 のも 0 で す ڕ 尤も近頃は 棚 0 ラ

の中 投 り込んだままだ つ た て言いますが」

才吉 0 費 (J 込 みは?」

+ 鳴 0 や三十 聞えた時、 は ある 表の方 か b 知 に顔 れ ま 0 せ 揃る ん が、 ってい 大 た したことは のは誰と誰 な だ 11 、ようで」

才吉も、

隣 不 ·思議 0 安兵衛 なことに皆んな表 \$ 勘次も」 に 11 ま したよ、 千代次郎も、

草間六 弥 は

れ は 仏 間に 居たそうで、 間 違 11 は あ りませ ん、 証 は 近

所 0 が二三人

女三人は?」

「三人とも奥に 11 たそう で すか ら、 Þ れ ば の三人 の うち 0

です

ガラッ は 物事 を簡 単 片 づ け ます。

だが、 女 あ ん な事が 出 一来る か な、 死 ん だと 思 つ た主人 が 生き

7 e st る を見たらそ の 場で 腰を抜かすか、 目を廻す の が 精 杯だ

ろうし

女三 人 の う ち 0 人 でなきゃ 人 組 ん で p つ た ح たらどう

でしょう?」

一妾同志 が か 11 そ れ P あ ッ と言 う 間 に 気 が 揃 う か 13

成程な」

道具箱 か 5 と当り を持出 主人 の **幽**ゅう 霊れ を 突殺 す 胆 つ 玉 は 大抵

じゃないぞ」

「すると親分」

ま ア、考えさしてくれ、 俺にはますます 判 らなく な つ て来たよ」

半次は深々と腕を拱きました。

「それから、 女三人の身持も手一 杯 に 聞 e st て見ましたよ」

「どうせろくな事はあるめえ」

すぜ。 主 人が 11 死 は ぬ と近所 番 若 (J お辰だ 0 衆 は遠慮が け `` あ な は 11 勝 か 5 手 な 何 彼も を ズケ ズケ 居 ま

話してくれます」

|

でも う お 柳 塀心 外と ろ は今じゃあんなに に 女、 人 Þ 二人昔の狼連が 尤も肥っては 肥って (J るが、 ゥ いるが 口 つ 踊 11 り 7 ちょ 0 居 師匠 な 上 日 可 が は ŋ な 11 今 ع

ね、親分の前だが」

「何をつまらない」

奉 崩 公 れ お 村 7 は 病 () 11 る 身 0 が 6 付 だ つ 11 て言 て H e st るん 前 いますぜ、 か だそう 5 寝 て で、 居 いずれそのうちに たそ 年増だ う で け す 世帯 そ れ 大 0 徳屋 た 御 が

うんと取られるところだ ったろう-って言いますよ」

「お辰は?」

親分が会って訊 () て 下さい 0 思 (J 0 外、 あん な のが許婚か何か

持って居るかも知れません」

昼から滅 たと 子の変った の変 それ てくれ」 つ た人間はない で宜 ~ 入い かろう。 人間はなか ったとか、 ともかく、 それ か、それを訊き出してくれ。 ったか、 真^{ほんもの} 昼まで滅入って居て、 から、 の主人が殺されるまで 今 日 男でも女でも構わない、 日 のうちに、 夕方から元気にな 朝 燥 い H コ 口 0 間に、 それを搜 で居て、 様子 様 つ

「親分、そいつはむずかしいね」

そう言いながらもガラ ッ は、 元 の店の方へ 取 つ て返しまし た。

六

女三人 の 調 べ には、 平次もさすが に手を焼きました。

「お柳と言ったね」

「ヘエーー」

ょ 삞 った、 見事な恰幅、 そ の く 、せおち澪、 れるよう な 艶なま め か

さ、 踊 で鍛えた二十三の美女は、 全く · 形容 0 しようも な

女でした。

「勘次と廊下 で 鉢合せをし たそうじ Þ な 11 か

半次は鎌をかけました。

驚きま したよ、 あ の時は、 いきな り 暗 閣 か ら飛出すんですもの」

お柳は何の細工もありません。

何をして居たんだ」

自 分 部 屋 行 つ て、 羽織を引 つ か け て来 たところ で したよ、

夜更け に な ると、 薄寒くな りますんでね エ

悲 鳴 は 何 処で 聞 いたん だ

勘 次 鉢 合せをす る、 ほ ん 0 ち ょ 11 ح 前 で たよ Ŧī. 六 間後ろ

の方か ら何とも言えな e s 変な声が しまし た

何 ん な声だっ た

力 ッ と言 ったよう な、 丰 ヤ ッ と言 つ たよ

Þ って 御覧

ま ア、 親分さん

どうも少 いに く 11 女です。

次はお村、 二十五六 0 年増で、 った程度の魅力し 少し華奢な女ですが、 昔はさぞ

右衛 の寵が衰えて 居た ح いうの もそんな為 で

美し

か

ったであろうと言

お前 はあの時どこに 居たんだ」

頭痛 が して、 部屋 に 休ん で居りまし

主 が 死 んで、 どう 思う?

さ ア

何 か と皮も二た皮 b 剝は が な け れ ば、 本当 の 心 持 0 判 5 11

言 た 種 類 0 女 で す。

主人が 生きて納戸 に 隠 れ て居 ることを 知 つ て 居 た筈だ

そんな事は 少し b 知 りませ ん

村 顏 は 急 引 締 り ŧ た。

た。 最後に若 た つ た () お辰 十 九 に は な つ おどおどしながら平 たば か り、 色白 0 可愛ら 次 0 前 K 坐 11 娘 つ て居 で りま

孫

かありません。

な奉公をする のが痛 々し e s 位。

お前は () つ か ら此 処に 来 てい る 6

「三月ほど前 からでございます」

家は ?

市 ·ガ谷」

両親はある 0 か 11

母と弟だけ居 ります」

主人が死ねば、 すぐにも家 ^ 帰 りたかろう」

匂 う襟元、 黙 ってうなずきました。簪がキラキラと揺 平次も何 か 押して物を訊く気もなくなります。 れます。 美し 顔

あの悲鳴は何処で聞 いたんだ」

お辰は 顔を挙げま た。 唇 は 動きますが、 声 は出 ま せ ん。

お前 あの主人が殺された時の悲鳴は何処で聞いたんだ。 の居た場所が判らないと、 お前も疑いを受けることになるが」 その時

助 け 0 つもりで、 平次がこう言ったのはよくよく の事で

う。

主

の声

は、

あ

0

何

に

も聞きません」

で

辰 0 答は予 想 外 た。

皆んなが、 悲鳴を聞 いたと言うぜ」

それは、 あ 0 私だったかも知れませ ん

え ッ

٤, あのとき奥から店 不意に 0 方へ 行こうとして、 仏間 の裏の廊下を通る

お辰は固唾を呑みました

「不意に、 死んだと思 つ た旦那 様に逢っ たんですも 私は

思わず、 声を出 したような気がします」

「幽霊と思ったのか」

「え、 あんまり驚 いて、 転げるように自分の部屋 ^ 戻りました。

それ いの切り、 しばらくは何にも知りません」

ありそうな事です。が、悲鳴を挙げたのがお辰だったとすると、

今まで提供された不在証明にいろいろの支障が起ります。

「それは大変なことだ、 その時主人は確かに生きていた んだ

\ \ L

「え、幽霊と思い 込んで逃出しましたが、 私 の顔を見て、 何か言 つ

た様子でした」

「よしよし」

りました。 平次はこの娘 あまりにも正直で、 からこれ以上何にも訊くことの あまりにも駈引のな な e st い態度です。 のを見て取

七

「何だ、八」

親分、

判

りま

「先刻言 い付け たじ ゃ あ りません か、 昼と夜とで、 様 子 0 変 った

人間ですよ」

「忘れたわけじゃな 平次の無関心な態度が () 此方にも大変なことがあったんだ」 少し八 <u>Fi.</u> 郎をうろたえさせま た。 掛ってい

る

んだ」

「ヘエ――、何んなことで?」

お前 0 方 から、 訊こう。 誰だ , 昼と夜とで様 子 0 変 つ た 0 は

「お柳ですよ」

「なに」

前 おら に浮 ぁ 行 かれ しくな 0 って、 踊 切 0 師 って居たのが、夜にな つ 泣 て、 匠 e st ですよ。 線香を上げたり、 て見せたり、 H 0 暮 れるまで、 大変な芝居だったそうですよ」 ってあっしが帰 念仏を称えたり、 お 花 見 ってか 0 前 時 0 々 ら急に H は 棺^かん 見 た 4

「そんな事だろうと思った、 もういちどお柳を伴れて来てくれ」

「ヘエー」

ガラ ッ 八は横 つ 飛 に 飛ん で行 く ٤ ح ん どは お 柳 0 手 を 取 って

グングン引っ張って来ました。

あれお 前さん、 痛 いじゃ な *c y* 0 私 は 何 に b 知 り Þ しま せ

んよ、あれッ」

何を神妙な悲鳴 な ん かあ げる んだ、 痛きゃ 素直に あ んよをし

ブラ下がるから引 摺ることになるじゃ な e s か

お前さん 無理だよ、 そんなに早く 歩けや しな € **∫**

踊 の師 匠 のくせに、 あんよが上手もねえもんだ。 まごまごしや

がると、縛り上げて引っ担ぐぞ」

「あッ、親分」

Ŧi. 郎 の剣幕におどろ いたか、 お柳はようやく立ち直 つ 平

次の 待 つ て いる部屋まで辿り着きました。

お 兀 Þ お どかしじゃないぞ。 主人 殺 の 疑 11 は お前 に

「親分」

柳 はさすがに胆を潰したものか、 平次の前に タ ^ タと坐り

ます。

主 人 の生きて居る 0 をお 前 は 見た筈だが 何 処で見た」

「親分さん」

「嘘を吐くと大変なことになるぞ」

納戸へ入ると、 死んだと思った主人がいるん ですも の、 驚

くじゃありませんか、親分」

「それは何時のことだ」

八五郎親分が帰ってから 間 P な < 戌刻少し過ぎで

それで、 あ ゎ てて殊勝ら い顔をしたの か。 呆れた女だ」

「でも、親分」

柳 の身体はまたクネクネと媚態を作ります。

「それを誰に話した」

にも言や しません。 言 うも 0 で す か、 大 事な事で

「それじゃ孫右衛門殺しは手前だ」

えッ

鳴を聞 11 て か ら 引 つ 返 て主人を と突きに 廊 下 で 次

と鉢合せをした筈だ」

違 いますよ、 飛んでも な e st 0 あ ん な 結構な主人 を殺 し て P

で すか、 それに悲鳴を挙 げた 時 は もう、 旦 那は 刺さ さ 居

るじゃありませんか」

いや、 悲鳴は主人じ Þ な 11 お 一辰だ。 主 人は あ 0 後 で 刺さ た

のだ」

女はあり それ Þ ゃ お辰ですよ、 な *()* 主人に可愛がられながら、 孝う 行う 面ら をしやが つ て、 一番 怨ら あ ん ん で な 11 たお ヤ な

辰 が、 主 一人を殺 したに 不 崽 議 が あ るも 0) か

お は 嵩さ に か か つ 7 言 11 募 り ます。 平 次は ح の 女 0 か 5, ま

だまだ i s ろ 4 ろ 0 事 が 引 出 せそ うな気が しま た

11 Þ お 辰 は 主 人 0 生きて居 る 0 を 知 ら な か つ た筈だ。 を

用 意 する 暇 は な 15

4 え e s え お 辰は 勘 次 に 聞 (V た に 違 11 あ り ま せ λ 畜 生 ッ 何

てイ ヤ な 奴だろう」

勘次 P 知 つ て る筈 は な 11

私 が 教えま たよ。 そ っと、 あ 子にだけ そ を 勘次 0 野

郎 お 辰 に吹き込 ん だに違 いあ りませ ん

な ほど、 勘 次な ら孫右 衛 門を刺す隙が あ つ た筈 だ

エ

ラ IJ ع 目 配 せ、 八 Ŧī. 郎 は そ 0 まま 飛 ん で 行きました。

家 0 平 中 次 で、 は ح 0 番 時 可愛 ほ ど 5 厭 な 思 41 少 11 年 を 勘 次を主 たこ ع 殺 は あ し 0 ŋ 罪 ま で せ 縛る ん 大 0 徳 は 平

次に取 って は、 全 < 我慢 0 出 来 な 11 ع だ つ た 0 で す。

が そ 0 ら、 当 は 時 動 機 0 不 0 文律 如 何 で に か か た わ 平次は らず、 そ 磔り 刑け 0 まま逃 0 極 刑 出 に 処 せ た ら 11 れ

親 分、 つ れ 7 来ま た

悩みなが

眼

を

つ

چ

つ

7

事

0

成行

を待ちま

た

引き 、据えます。 眼 を 開 ガラ ッ 八 は 勘 次 0 肩 先を 押 えるよう に 畳 0 に

勘次、 飛 ん でもねえ事をしてくれたなア」

平次の声には涙がありました。

「親分、あっしじゃありませんぜ」

|何?|

勘 次は 少 年ら 引 締 つ た 顔 を挙 げまし た。

刃^は物の あ、 っしは まで用意しました-旦那が生きて居ると聞 一でも、 悲 いて、 鳴を聞 一と思 () 7 あ 11 に 9 殺す が 駆 つ け 付 りで、 け

時 は、 旦 那は もう殺されて居たん にです」

「何だって主殺しなんか考えたんだ」

お辰さん が 可哀想 です。 あの人は親孝行 で町 内 の評判者 で すよ。

旦 那 がお 金 を積 で買 って来た のを私はよく知 つ て 居ます 同

じ市 ケ谷で生れたんですもの。 お辰さんは毎日泣 いて居まし たよ」

お前とお 辰は幼な馴染と言うわ けだな

ガ ラ ッ \boldsymbol{b} 妙に 和なご ゃ か な 口を 挾は みま した。

「それで主人を殺す気にな ったとは、 一応尤も のようだが、

ない心掛けだぞ」

平次は苦い顔を見せます。

ヘエ でも本当に殺さな か つ たんです」

「証拠はあるのかい」

匕首 を見て下 さ 4 宵 0 うちに 奥か ら持 出 た ん

血 な か 附 11 ちゃ 居ません これを持って飛込むと、 もう旦那

は殺されて居たんです」

か 5 出 ほ ど 0 小 さ 11 匕首、 拔 11 て 見 ると、 な ほど

血も何にも附いては居ません。

ん なも のを、 何 だっ て捨てずに 持 つ て 居た

んだ」

親 分 わ てた 事 これ をす ん は で す。 つ 体どう か 旦 り 忘 那 が し れ たこと 殺され て、 今よ で て う し *(y* Þ る ょ う 0 思 を見ると、 11 出 た 位 自 分 で す が 殺そ

ガラ ッ b 妙 に ح 0 少 年 が可哀想 に な つ た 0 で

平次 は 黙 り込 ん で し ま 11 ま た

ま 0 時 雨 は過 戸 ぎ行きます。 0 隙 から、 丰 ラ 何 丰 時 ラと 0 間 朝 に Þ 0 ら 光 夜 が 射 が 明 し 込 け ん で 来る ま だ 閉 0 め た ま 面

また新 雨 戸 をあけて、 知 恵 が浮 か تتم 服 か b Þ 知 つ れ て 見よう な か、 そん な事 でも 5

喰ら

つ

た

奉

公人達は、

まだ

雨

戸

を開

け

ょ

うとも

しま

せ

6

行ん 燈んし 0 灯 で /煙 煙 草 を 喫 付 け 7 11 る 次を後 ろ ガ ラ ッ 八 は

枚 戸 を 繰 ŋ ŧ た

サ ッ と流 れ 込む 朝 0 光

良

い心

持だな、

八

親 分 れ を見て下さ 11 よ。 大変な 0 が あ ŋ

何

手なりず **H**. 郎 そ 0 指 す 方 に 掛 を 覗 け た < 手拭 ٤, 戸 袋 水 0 下 ぼ に け 据 た え た 血 大 自 痕と 5 然 石 0 見 事

附 4 て 居 る で は あ り ま せ ん か

昨 夜 は 誰 P 死 骸 に 手を 掛 け な か つ た 一筈だ な

味 を 悪 が つ 7 寄 ŋ 付 11 た 者 b あ りま せん ょ 0 揃 61 9 7

な 奴

5

で

٤, あ れ は下手人 が 匕首 で 剌 た手を洗 つ て 拭 11 た P 0 に 違

11

ないわけだ」

「まア、そんな事で」

近く 寄 って見ました が、 それ 以上 は 何 に b 判 ŋ せ ん

おそろ しく落着 11 た奴だな。 勘 次や お 辰 0 芸じ ゃ な 11 雨 を

開 けて手を 洗 つ て、 済まし て居 た ん だし

「雨戸にも血が附いちゃ居ませんか」

ガラ ッ は 飛 付 くように 雨戸 をしらべまし たが、 ょ ほ 用 心

崩 け た \boldsymbol{b} 0 と 見えて、 そこに は 何 の 痕 もあ りませ ん

待て 待 て、 主人 の殺され たの は、 お辰が悲鳴を挙 げ て お 柳 لح

勘 次 が 鉢 合せをする迄の 間だ。 そ 0 間 仏間 0 裏 0 廊下 行 け

る人間 は――

「解った、八

「え?

「お村だ」

お村は自 分 0 部 屋 で 休 ん で居 たと言 つ た じ Þ あ り Í せ 6

「嘘だ」

お村 0 様 子も 顔色 4 朝 か 5 夜まで少しも 変ら な か つ たと言う

のは?」

お村 は、 主 0 生 き て 11 る 事 を 知 つ て *p'* お 柳 違 つ て 様 子 Þ

顔 色を変える 女じ ゃ な 11 頭痛が すると言 つ 7 奥 引込 で 用 意

んだ」

をし、

お辰

の

悲

鳴を聞

13

物蔭

から飛出

て孫右

衛

門

を

刺

「でも」

いや、 他 K 間 は 居 な 11 お 辰 か 勘 次か お 村 のうちだ。

第 は て 幽ぅ 霊れ 0 間 を 違 刺 を せま 見 11 た だ 5 e s ع 思 少 つ た は 様 の P 子 間 Þ 違 顔 色 e s だ が 変 つ たが、 る だろ う 孫 右 思 衛 門 つ が が

も死骸 7 居た 滅。 多_たな 0 だよ」 な 事 つ で て 様 b 子 Þ 刺 顔 殺 色を変え 兼 ね な な い怨を e st 女 持 つ た 相 女も 手 が あ 妼 霊 る な つ て

壊っ る ように ŋ 平次は は 言 な 八 新 五 か 11 郎 切 つ 41 りま を説 た 本 0 当 き伏せ で 0 た。 しょ 構 図 う。 る を 自 築す 分 ع き で e s 組 う 上 み上 げ ょ る ŋ げ は、 た た め 間 自 違 分自身を は 11 斯 0 う 構ら 図ず 説 を き 伏 吅 き せ

「今度は間違いはないぞ。来い、八」

X

許 け 衛 え て、 て へ走る前 な 村 生き は 一千 朝 容 に、 両 色 て 0 化し 0 0 11 形 平 た 粧; る 次 見 め 0 に 分けを 余念も の を発見 に 慧い 眼がん 主人 な 狙 する に 孫右衛 見 つ () ٤, 破 た ところを縛 5 0 門 で 最 れ す 後 て 0 愛を喪うしな が の 運命を ま られま 御家 つ た つ たお した。 匕が 0 首な で ず す 村 次第 Š は れ 0 ŋ 孫 右 衰 賭か

親分、変な捕物だね」

帰 る 朝 0 街 で、 八 Ŧi. 郎 は 話 か けました

孫 捕 物 は 0 つ 心 まらぬ 持 0 方 え が が 余 つ 自 程 分 面 0) 白 死 か ん つ だ後 た ょ の 気 を 見よう

ね 其 処 死 ぬ 行 ح 本当に < بخ こちとらは 泣 11 てく れ 金 る 0 で 買 が二三 つ た人気じ 人はあるぜ」 Þ ねえ か 5 有

11

ガラッ八の顎の長さ。

「向柳原 の 叔母さんは解 つ て居るが、 あとの二人は誰と誰だ

と平次。

一人は銭形の親分さ」

馬鹿野郎、 俺は泣くものか」

明神様の森の鳥だってね、あとの一人は言わねえ方が () e s 言うと殴られそうだ」

の笑い声は、 始めて朗々と響きました。 ハ ッ ハ ッ ハ **ッ** ∟

30

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「オ ル讀物」 昭和十三年四月号 文藝春秋社

底本 錢形平次捕物全集」 第四巻 河出書房 昭和三十一 年六

月三十日初版

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/